

目的：日本の「家族」が、法制度上「家」を離脱して久しいが、「九州」では、今なお、現実生活にその残影的様相は濃い。中でも、女性の日常生活に「嫁・姑」という呼称とそれにまつわる特有イメージと実質が深い影を伴って存在している。少産少死、前人未踏のモデルレス長寿時代到来、女性の社会進出増大などの渦中で「嫁・姑関係の存在」は、「家」の陰影の上に新たな課題を呈ね、その解決を迫られている。ドラマや小説で語られる感慨はつきないが、本質的解決を求めての実証研究は少ない。われわれは、家政学研究の一環として、問題の所在と実態を明確にし解決への示唆を得るために調査を実施(後述)、その解析を試みた。既報の第1報(平成2年11月、於鹿大)に続く第2報報告である。

方法：詳細は第1報報告、福岡市、大分市既婚女性計600を対象に、平成2年5月～6月、質問紙自記式留置法調査実施、統計処理による解析。

結果：第2報の焦点は、対象者の自己認知による「嫁・姑」の立場類別を軸に、その背景、各種の意識実態、地域比較、その他である。立場認定は、居住形態、続柄別など可能な限りの具体的類別設定設問による自己認知結果によった。立場「嫁」60.0%、「姑」18.1%、「嫁であり姑」4.2%、「いずれでもなし」17.6%、立場の生じる媒介は「続柄最男」が最多、年代的に「若年」は「嫁」、「高年」は「姑」の立場が多いが、50歳代に立場転換期がみられる。「嫁層」は「姑層」より「関係を日常的に意識する」「いやだと思う」割合高い一方で「同居による関係の肯定評価」も高い。また「嫁・姑関係の今後」について「肯定温存派(積極、消極)」40%弱、「否定派(積極、消極)」60%弱である。他、